

在宅医療に関わる院内・院外の全スタッフと家族との連携をキーワードに

2006年度の診療報酬改定で創設された「在宅療養支援診療所」は、届出数が約1万件に達している一方で、24時間対応などの条件もあり、外来診療との両立は難しいとする意見もあるようです。実際に届出をして在宅医療に取り組んでいる診療所では、どう受け止め、どう取り組んでいるのでしょうか。

今回は、かかりつけ医としての地域医療に専心してきた医療法人社団 裕和会 長尾クリニック (兵庫県尼崎市)を訪ね、在宅医療の現状と今後の課題についてお聞きしました。

継続性がテーマ

数より関係性を重視

兵庫県尼崎市に1995年に開業した長尾クリニックは、内科、消化器科、循環器科、リハビリテーション科を掲げる無床診療所です。6名の医師(常勤4名、非常勤2名)で、年中無休で診療しています。また、法人内に訪問看護ステーション「ゆうゆう」と居宅介護支援事業所「なごみ」も併設し、MSW、在宅事務部を合わせて「在宅医療ステーション」を外来棟の隣に増築しています。院長の長尾和宏先生は、開業当初から在宅医療に取り組んでおり、

他にも産業医や校医などの地域活動にも関わるなど、「地域の人に信頼される、身近な町医者を目指しています」という言葉どおりの活動をしています。

現在、在宅で診ている患者さんは約120名ですが、その多くは長尾先生が5~10年前から診ていた患者さんたちです。入院治療などを経た後に在宅医療を望んだ患者さんを、かかりつけ医だった長尾先生が訪問するようになったという自然な流れが大半で、病院からの紹介患者さんは20~30%程度です。在宅療養支援診療所としての届出後も、病院からの紹介を積極的に求めることはしていません。

「当院の在宅医療のテーマは継続性です。地域医療とは予防から外来診療、ターミナルケアまで、ずっと続い

ていくもの。だから何人を診て、何人を取ったかではなく、どれだけ長く、どれだけ深く患者さんと関わり、信頼し合っているかが最も大事だと思っています」(長尾先生)



医療法人社団 裕和会
長尾クリニック院長
長尾和宏先生

在宅医療のキーパーソンは 経験豊富な看護師

長尾先生に在宅医療に取り組む上でのポイントを質問してみたところ、「まずは優秀な看護師の存在が不可欠です」と話します。

頻繁に家庭を訪問することになる看護師は、患者さんやご家族に快く迎えらるる人でなければ務まらない、医療の知識や技術だけではなく、マナーや人間性も求められる、というのが理由です。

同院は訪問看護ステーションを併



医療法人社団 裕和会 長尾クリニック

設していることもあり、クリニックと合わせて15人の看護師がいますが、「幸い当院は優秀な看護師に恵まれています」と長尾先生。しかしながら、多くの訪問スタッフと患者さんを抱えているだけに、訪問計画の管理や調整、情報伝達は、最も苦勞が多く、難しい部分です。

このため、同院では誰がいつ、どの患者さんを訪問したか、できるのかといった管理業務に専任スタッフを配置しています。外来事務部のほかに在宅事務部として独立させ、4名のスタッフを配置し、スケジュール管理、医療費レセプトの管理などを担当しています。これら法人内の在宅スタッフ全員(約25名)での合同カンファレンスを週2回開催しています。

同院のカンファレンスには、医師や看護師だけではなく、ヘルパー、ケアマネージャー、事務スタッフ、MSWなど、在宅ケアに関わるスタッフが全員参加します。この場で、それぞれの患者さんの状態や治療方針などの情報が共有されるとともに、医師からの指示

や看護師からの報告、質問などが交わされます。

「在宅医療はチーム医療そのもの。医師だけが頑張ってもうまくいきません。各スタッフが情報を共有し、円滑なコミュニケーションを図ることが重要で、そのためにカンファレンスは不可欠」(長尾先生)

緊急時対応は 事前の説明がカギに

また、在宅療養支援診療所の基準を満たす上で必要とされている緊急時対応については、「必要以上に大きさに考える必要はないのでは」と話します。

同院では、夜間等の緊急時の連絡は、すべて長尾先生の携帯電話にかかるようになっていますが、「日中の訪問時に病状の変化や、その際の対応などについてきちんと説明していれば、夜中に緊急連絡が入るのは年に1~2回程度ですし、連絡が入っても電話対応だけで済むケースも多いのです。要は患者さんやご家族が、安心、納得

できることが重要なのです」と長尾先生。

ただ、頻度が少ないとはいえ、学会参加などで出張の場合には、必ず万が一の対応が必要になります。このため、同院では阪神間の診療所同士でネットワークを作り、



100名以上の在宅医療患者さんを診ている長尾クリニックだが、昔から訪れる外来患者さんも多く、在籍する複数の医師が3つの診察室で対応している。

不在時などは他の診療所に緊急時の対応を依頼できる関係を作っています。もちろん、長尾先生が他の診療所の患者さんを取った経験もあり、「普段からの信頼関係と、こうした医師同士の連携をうまく使えば、24時間対応という条件は決して障壁にはなりません」と語ります。

高評価の取組みも 目的ではなく結果だと考えて

かかりつけ医の役割として、外来診療から在宅医療への経過が自然であるように、在宅患者さんを看取することも、ごく普通の流れだと長尾先生は考えています。

在宅療養支援診療所が行うターミナルケアには、診療報酬改定によって高い評価はつきましたが、スタッフにも「看取りは目的ではなく結果だ」という考えを徹底させています。

しかし最近では、長尾クリニックが方針とする「長いおつきあい」の患者さんばかりではなく、急性期病院から末期



週に2回行われるカンファレンス。ときには看護師から処方案の変更を提案する声も聞かれるなど、経験と知識が豊富なスタッフが揃っていることがうかがえる。